

## ベアナドッテゴードン & 高齢者住宅

報告：服部 眞

### ★はじめに

ロスキレ市北部の小高い丘の上に、近代的な二階建て4棟と、その西側に平屋の住宅52戸があり、全体でベアナドッテゴードン住宅センターを構成しています。前身は、1976年に設立された老人ホームで、レジスタンス運動を闘いナチスドイツの捕虜となった人たちが作ったものです。現在は、市に移管され入居者が暮らし、通所者が集まり、介護を受けています。



<ベアナドッテゴードンで>

### ★通所の場合

通所者は50人ほどで、低下している認知能力を刺激するため、大型のディスプレイを使って、パソコンからクイズ、音楽、風景などを選択するベルファスト方式を行っています。ホールは広々としていて明るく、食堂コーナーも併設されています。できる人は、自分で食事を取りに行くことができるように、床に黒い足跡がつけてあり、スタッフの工夫が見られました。

### ★入居にあたって

入居者は管理等以外の3つの同じ形をした建物に60名が居住しています。入居の要請がなされると、スタッフがその人の家を訪れ、調査し、判定を行います。認知症のため、家族の同席、入居への同意が必要とされます。

入居の決定が行われると、家族が本人とともに引越しを行います。入居すると、コンタクトパーソンと呼ばれる担当者が一人つき、コンタクトパーソンを中心に1週間以内にスタッフ会議を開きます。その人の生きてき

た歴史、現在の生活状況、好物などをあらかじめ家族にも聞いて、これからのリハビリに役立てます。その人がどうしたいか知り、生活スタイルを確立するように援助します。食事、その他のアクティビティーを通してリハビリを進めてゆきます。

### ★現在の問題点と対処

スタッフから、現在の問題点として、入居後、自室に引きこもってホールに出てこない人を、いかに連れ出すか、ということがある、との話でした。対処として、催しに招くなどの試みをしているそうです。

### ★ショートステイへの用意

地域の突然の要請に答えらるよう、ショートステイ用居室を3つ確保し2週間以内が原則ですが、より長期間の要請にも応えらるそうです。

### ★センター内見学

センターの運営は80名のスタッフ（内看護師11名）で行っています。居室は管理棟

と同じつくりの清潔な建物内にあり、中央がホールで二階まで吹き抜けになっていて、開放感があふれていました。居室は、二階も含めスタッフがホールにいても見渡せるようになっています。車椅子を使う人は、一階に入居しているようでした。

見せていただいた居室には、自宅で使っていたソファがあり、落ち着いて暮らせるように配慮されていました。

### ★入所から居住への転換とその背景

デンマークでは、入居している高齢者、障がい者は居住者としてこれまでの生活スタイルが尊重され、その人らしく生きることがめざされています。スタッフはその援助者として存在します。決して無理強いしたり管理をするためではないようです。

1970年代はデンマークでも、日本と変わらず、施設入所により保護、管理する面があったようです。1990年代ころから、そこに暮らしている人、居住者、という考え方へと転換したようです。介護は人権、という人権の広がり、深まりを示すようです。



<リューケさん>

### ★リューケさん宅への訪問

最後に、平屋の高齢者住宅にお住まいのリ



<捕虜の経験もあるモンスさんと>

ューケさん宅を訪問しました。

50㎡ほどの広さに、キッチン、居間、ダイニングルーム、寝室、洗面所があり、ご主人をなくされ、今は一人でお住まいです。整頓され、バルコニーもあり、豊かさが感じられるお家でした。

この平屋住宅の入居基準は、身の回りのことが自分でできる人、自活できるということが条件になります。82才になると言うリューケさんは、大人数の私たちを、暖かく迎え入れてくれ、しっかり歩いて案内してくれ、明瞭な声で説明してくれました。

「私が生きている限り、あなた達（夏代さんと私たち）を招待するわ」と暖かい言葉をかけてくれました。「困っていることは？」と聞かれてリューケさんは、「坂道を登るのがつらい」と答えていましたが、なるほど、帰りの坂道はリューケさんよりも若い私でさえ少しつらかったです。



<リューケさんの自宅前>